

## 『野津原方言集』の電子化による地域と学生の交流

別府大学文学部国際言語・文化学科

教授 松田 美香

## 1 『野津原方言集』とは

大分市南部に位置する野津原（のつはる）地域は、平成17（2005）年の合併前は大分郡野津原町（1959-2004年）。江戸時代には肥後藩から現在の太田市鶴崎まで延びる、参勤交代に使用された「肥後街道」沿いの、熊本を發して4日目の宿場町であった。今市（いまいち）の「石畳」は、その当時の風情を残す。街道には川を渡る箇所が七つあり、これが「七瀬川（ななせがわ）」の名の元になったと伝えられている。当時、沿道には店も建ち並び隆盛を極めた。勝海舟、伊能忠敬、坂本龍馬などが通った（参考文献①）。

『野津原方言集』は、野津原町の有志7名が野津原方言を文字化して、日常生活や伝承物語を綴った冊子である。きっかけは、野津原地区の文化財調査の一環として方言採集を始めたことだったそうだ。平成7（1995）年から平成10（1998）年に前編・後編・こぼればなしの3冊本として野津原町教育委員会から発刊され、一度は完結した。ところが発刊してみると反響が大きく、好評に応じて30年間、現在までに年に1～2冊のペースで続編29まで続いているという。内容としては、方言辞書・昔話・民謡などを盛り込み、単発や連載として載せている。毎号100ページ前後の手作り冊子で、有名無名の画家が表紙やイラストを担当



写真1：実際の『野津原方言集』

し、毎号色違いの表紙で手書きのタイトル文字。懐かしさを感じる装丁である。通巻35冊には、30年間の創意工夫と郷土愛が詰まっている。

執筆・編集・製本を手掛けるのは、会長の小野寿祐氏、事務局長の佐藤源治氏、赤星ヨシミ氏、那須政子氏の4名である。B4版用紙を半分に折って両側に印刷し、袋とじにして背表紙を糊付けした冊子である。それぞれの行程を4人で分担して作成しているそうだ。当初7名で出発したが、3名は鬼籍に入られた。現調査員の4名にうかがうと、方言を求めて方言調査旅行、民放ラジオに出演した経験もあるそうだ。最高齢（97歳）の佐藤氏はいつい最近まで小学校で読み聞かせに行っていたとのことで、大変精力的な方たちである。

## 2 『野津原方言集』電子化の必要性

『野津原方言集』は現在までで35冊。最初の3冊以外は手作りの冊子で、原稿はワープロ機で作成しデータを上書きするので、電子テキストは残っていない。この冊子の特徴である、方言音声文字に写す「方言体」は琉球歌謡の『おもろそうし』（参考文献②）を代表として各地にあるが、30年間35冊を同じメンバーで出し続けている方言集は、日本で唯一と言えるのではないだろうか。定期購入者や寄贈先の公立図書館等では保存されると思うが、紙媒体だけでは心許ない状態である。

また、報告者はかねてより講義授業の中で、学生たちに「実際に語られる方言」を学ぶ機会を提供したいと考えていた。大分方言で語られる「豊後浄瑠璃」をYouTubeで聞かせることもしていた（参考文献③）が、声の主はすでに故人であり、報告者にとっても不明な点を確認する術がなかつ

た。どんな言語も同じだが、方言体を読み解くには集中して方言を「学ぶ」必要がある。ただ講義で聞かせるだけでは、おそらく難解・退屈で頭に入らないだろう。さらに、内容の豊富さや面白さを理解するには、ある程度の量を読みこなすことが必要だと思われる。そんなある時、学生たちに授業の中で『野津原方言集』を電子化し、内容を理解させる方法を思いついた。不明な点は、実際に作者である調査会の方に尋ねることができる。これこそ「生きた方言の学修」になると、早速企画を練ることにした。あれこれ考えた結果、オノマトペ（擬音語・擬態語）や感動詞を講義の前半で取り上げ、『野津原方言集』の本文からオノマトペや感動詞を見つけ出し、データベースを構築・共有するという授業計画を立てた。

令和2（2020）年、新型コロナウイルス感染が世界中に広がり、方言研究者の間でも臨地調査が難しい中で談話の文字起こしや方言集の電子化データを提供し合う動きがあり、それも大きなヒントになった。

以上のような必要性、つまり「保存」「教育」「研究」の3つの必要性から電子化が必要だと考えたのである。特に、生きた方言を学ぶ「教育」のためには、今において他にはないだろう。

### ③ 協力体制

佐藤事務局長に電子化の許可や交流会を申し込んだのが、令和2（2020）年の夏であった。話を聞くとすぐさま快諾してくださり、OCR処理用に全35冊の寄付を申し出てくださった。

「大学等による『おおいた創生』推進協議会」にも採択され、印刷会社にOCR（光学的文字認識）処理を発注した。夏以降も新型コロナウイルス感染者数が全国的に減少しておらず、交流会はZoom会議システムで行うこととし、大分市野津原支所で会議室を使用させてもらうことにした。報告者の実力では、Wi-Fiやそれに伴う設備の整った場所を借りなければ、遠隔での交流会は実現できなかった。野津原支所の協力は非常にありがたかった。

10月下旬にOCR処理をしたWordファイルが

届いた。次の段階として、方言集本文を1枚ずつ手作業でスキャンしPDFファイルを作成した。アルバイトの学生と取り組んだが、目標の15冊に届かず12冊までとなった。しかし、結果としては色付きの表紙の絵やイラストも残すことができて良かったと思う。

### ④ 授業への組み込み

さて、別府大学にはmoodle（ムードル）という、オンライン授業の基盤となる仕組みがある。その中の「言語文化論Ⅱ」という科目上に数回に分けて、『野津原方言集』のWordファイル、対応するPDF原稿を載せた。学生たちには1回約8ページ分、PDFの通りに整形・修正する課題を出し、それを5回行った（合わせて約1,200ページ分）。ほとんどの学生はすぐに作業に慣れた。その際に意味のわからなかった語句、方言調査会の方に質問してみたいことなどを記入する「ワークシート」も提出させ、次の授業内で解説しては次回の課題を指示した。報告者では解決できない部分もあり、それは交流会で質問するように伝えた。

もう一つ、学生たちには自分の担当範囲から、オノマトペと感動詞を抜き出してデータベース化する課題も課した。それが「野津原方言集データベース2020」である。このような電子化を体験させることによって、方言資料とより深く接することが可能になり、交流会への参加動機も確立させることができたと感じている。

### ⑤ 第1回Zoom会議システムによる交流会

11月26日10時40分から、野津原方言調査会と学生とのZoom利用の交流会を実施した。野津原支所の会議室に調査会の方に集まっていただき、いわゆる「遠隔リアルタイム授業」の方式で報告者が調査会の方たちの発言を中継した。

まず、会長の小野氏からは「野津原で使われていることばを全部集めようと思ったら、それに生活文化が全部付いてきた」、「みなさんに研究しても

らえて嬉しい」というご挨拶のことばをいただいた。

次に学生たちから、調べてもわからなかった単語や野津原地域についての質問が出て、それに対して研究会の方から返答をいただいた。「人間の固えな一心う許してち頼らるるが／岩ん固えな一どうにんならん（人間の固いのは心を許して頼ることができるが、岩の固いのはどうにもならない）」などの文で区切り方がわからないので教えてほしいという質問には、「う」などの表記によって助詞が付いているということがわかるようにしたり、「／」のところ所に原文では1マス空けてあるのだが、そこで息継ぎ、区切れとなっているとの返答があった。また、「ヤシブする／隣ンがきがソリュミチヨル（ヤシブすると隣のガキがそれを見ている）」の「ヤシブ」とは何かという質問には「卑しん坊が語源と思うが『ヤシボをする』で、人に隠れておやつなどを食べること」という返答があった。他に「クズイチスル／シゴター／モーデケン（屈みこんでする仕事はもうできない）」、「シャブシャブ」は「激しいさま」、「どっとんどつとん」は「どんどんと・一気に」、「ほそほそ」は「やる気なさそうに」、「ヒューラヒューラ」は「ふらふらと」となど、質疑応答が続いた。歌の「ホーチョヌベヌベ」は郷土料理「鮑腸（ほうちょう）」を作るために小麦粉を伸ばすことで、「ぬべぬべ」は「伸ばせ伸ばせ」にあたることがわかった。方言だけでなく、「みなさんが考える野津原の良さを教えてほしい」という質問には、「地域のまとまりの良さがあり、伝統的行事を大切にしているところ」、「自給自足ができている」という返答があった。

野津原方言調査会からの質問もあり、「みなさん方の故郷のことばを使うか」に対して、「カベチョロ（ヤモリ）など今でも使っている」と即答する学生もいた。さらに「学生が使っている方言を教えてください」の質問には、「祖父と暮らしていて、道を案内するときにドンツキ（突き当り）を使う」という返答があった。また、「方言を使うことに恥ずかしくないか」という質問に、「恥ずかしくない」と答えた学生が圧倒的に多かった。調査会の方々から「良い機会をいただいて嬉しい。集大成になったと思う」、「堂々と方言を使ってい

ることは自信を持って生きているという証拠だと思う」、「方言を自己アピールに活かしてほしい」というメッセージもいただいた。

その他に、「野津原地域は二世帯住宅が少なく、高齢者の一人暮らしが多いのが心配」、「交通の便が悪いためや子供の塾のために若い世代の住人が少ない」、「子供がおじいちゃんおばあちゃんのことばを聞く機会がない」などの地域の問題点も挙げ、それが方言集を発刊する原動力になっているとの話もあった。

学生たちは多少緊張していたようだが、この交流会によって双方の距離感が縮まったことは間違いない。



## 第2回 Zoom 会議システムによる交流会

その後も学生との作業は続き、年明けからは時間外学修として調査研究をするように課した。その結果を報告する授業では、オノマトベや感動詞についてのものが多かったが、歌詞や特定の方言単語やそれ以外の疑問などもあった。

令和3年1月21日の10時40分から、第2回交流会を実施した。最初に本取り組みに対する協力へのお礼と、試作品ながらCD-Rに収めた『野津原方言集電子版（前編～続編9）』の贈呈を行った。内容は、『野津原方言集』前編～続編9までの全ページのPDFファイル、同内容のOCR処理した本文ファイル（Word）、学生たちの調査研究報告ファイル（PDF）、野津原方言集データベース2020（Excel）である。

そして学生たちの研究発表に移った。オノマトベの中に笑顔や涙に関するものが多いという「心情を表すオノマトベ」の傾向を調べたものや、「ぬぱっと（パカっと）」「ひょかっと（急に）」など共通語にはないものを調べたもの、データベースを集計した結果として呼びかけや応答の感動詞が多いというもの、母親を呼ぶオカチャンという方言と他の九州方言を比較したものなど、どれも学生たちが自分の視線から興味を持ったり違和感を抱いたりしたことから調べた内容である。

それを視聴した研究会の方々からは、「こんな

に細かく熱心に調べてくれて嬉しい」という声が挙がった。また、オノマトペの「キンキン」について、「キンキンに冷えた水」などの他に「キンキン泣く」という、学生はなじみのない使用例について、調査会の方から高い音や金属の鳴る音としても使われるという説明があった。「人吉女房」と出てくるが、「人が良すぎて何でも他人に与えてしまう女房」だという回答で、「人吉」が地名ではなく「お人好し」の意味だとわかる例もあった。夜這いの失敗話に出てくる「りゃー」の意味が知りたいという質問には「驚きや失敗が混合したような気持ち」という返答があった。この方言集には、恋愛に関する内容も多く載っている。

何といっても学生を感動させたのが、佐藤事務局長の歌唱であった。「方言集に載っている歌を実際に歌ってほしい」という学生の要望で、事前の打ち合わせをしたわけではなかったが、佐藤氏が自ら作詞した「七瀬馬子唄」を一節、アカペラで歌ってくださった。抑揚豊かに「ハァ七瀬のせせらぎホイホイホイ」が響き、Zoomの画面上に「拍手」が咲いた。「生歌を聞くという他では体験できない貴重な体験をすることができた」、「歌のところで歌うリズムや音がわからなかったけどこんな感じで歌うんだなだと思った」等の感想が多数あった。

## 7 まとめ

授業後に学生が回答したアンケートには、「最初はどこが切れ目かもわからず、意味もよくわからなかったが、次第に読めるようになり内容も理解できるようになった」、「以前は、方言は耳で聞いたり、歌や話などあり、方言は奥が深いなと思った」、「方言集を電子

化して読むなどしながら1つの地域の方言について深く知っていくのは、この授業が初めてだったので、とても興味深く新鮮に感じた」など、肯定的な感想が多かった。さらに「(野津原方言調査会のために)何かできることがあったらしたい」、「自分の方言を見直したい」と書いている学生もいた。野津原方言調査会の30年間の取り組みの重み、そして交流会で学生にかけてくださった温かいことばによる反応だと思われる。

今後の予定としては、「言語文化論」の講義・授業内で残りの整形・修正を行っていくつもりである。オノマトペ・感動詞に関わらず、疑問点を列挙していき、調査会や報告者の解説を付記していくようなデータベースを作ることも有効だと思う。完成版に向けて、表記上の特徴や共通語を併記する必要もある。促音表記の揺れや誤植などに対する整理も必要だと思われる。

### 【付記】

野津原方言調査会と大分市野津原支所の皆様、その他本取り組みにご理解・ご協力いただいた皆様に心より感謝いたします。

なお、本取り組みは、「大学等による『おおいた創生』推進協議会」の支援を受けています。

### 【参考文献】

- ① 野津原伝統文化継承の会(2008)『方言でつづるふるさとの歴史とくらし』大分市役所野津原支所
- ② 外間守善、波照間永吉(2002)『定本おもしろそうし』角川書店など
- ③ 豊後浄瑠璃(『羅生門』)山布市湯布院在住者、佐藤保見さんの平成15(2003)年82歳時の語り。  
<http://www.d-b.ne.jp/signa/sound/rasyoumon.html>

写真提供：別府大学広報室 石川万実氏



写真2：野津原方言調査会との交流会



写真3：七瀬馬子唄を歌う佐藤氏



写真4：野津原方言調査会と報告者